

1985年10月16日には、経済企画庁主催の全国都道府県省資源・省エネルギー実務担当者研修会（於；宮崎市）にて、これまでの活動報告を行ったことがきっかけとなり、自治体関係者の視察の申し込みも来るようになりました。

見学者が訪れた際には、この保管場所に案内し牛乳パックや古紙の集め方を説明したり、診察室だった部屋には水道場もあるので、手漉きはがき作りを体験してもらったり、大いに活用させていただきました。

翌年の1986年7月、海外からの視察を受け入れることになりました。

「国際青年の村 '86」（青少年育成国民会議・総務庁共催）に参加した、資源の再利用とごみ問題に関心のある外国の青年達15名が、大月市を訪れ、牛乳パック再利用について、意見交換を行ったり、手すきはがき作りを体験したり、国際交流を行いました。

当時の西ドイツから参加した青年は、「牛乳パックが再利用できるとは思わなかった。広く活用できるのを見て素晴らしいと思った。」と感想を述べ、新聞のローカル版にも取り上げられました。

牛乳パックの手漉きはがき作りは、現在でも大変好評ですが、紙漉き体験は単なる趣味の推奨ではなく、行うにはきちんとした理由がありました。先述のように、牛乳パックを製紙メーカーへのルートに乗せるには、集めるまでに長期間かかりますが、一人一人の協力が不可欠なので、牛乳パックリサイクルに関心を持ってもらう手法として、「家庭でもできるリサイクル、紙漉き体験」を紹介していました。同年行われた「かいじ国体」の選手へのお土産に、牛乳パックによる手漉きはがき

が取り上げられ、大月市内の小中学校でも、さかんに手漉きはがき作りが行われました。

紙漉きの原料である牛乳パックからのパルプづくりは、今でこそ紙好き交流センターの奥上代表の手作り機械によって容易となっていて、各地の福祉事業所で紙漉き製品の助力になっていますが、当時は全くの手探りでした。そのため牛乳パックのポリエチレン剥離の溶液の特許、溶液作りの窯を売りつける詐欺と思われる者が現れ、平井主宰をはじめ、いくつかの福祉作業所がその被害にあったりもしました。被害にあった方達が正確な情報が欲しいと、全国パック連に加盟されたこともありました。

（次号へ続く）

1986年

牛乳パック再利用運動

外国からも視察団

大月市は、資源の再利用とごみ問題に関心のある外国の青年達15名が、大月市を訪れ、牛乳パック再利用について、意見交換を行ったり、手すきはがき作りを体験したり、国際交流を行いました。

当時の西ドイツから参加した青年は、「牛乳パックが再利用できるとは思わなかった。広く活用できるのを見て素晴らしいと思った。」と感想を述べ、新聞のローカル版にも取り上げられました。

牛乳パックの手漉きはがき作りは、現在でも大変好評ですが、紙漉き体験は単なる趣味の推奨ではなく、行うにはきちんとした理由がありました。先述のように、牛乳パックを製紙メーカーへのルートに乗せるには、集めるまでに長期間かかりますが、一人一人の協力が不可欠なので、牛乳パックリサイクルに関心を持ってもらう手法として、「家庭でもできるリサイクル、紙漉き体験」を紹介していました。同年行われた「かいじ国体」の選手へのお土産に、牛乳パックによる手漉きはがき

朝日新聞

1986年7月28日

平井さん（左）から手すき紙作りの指導を受ける外国人たち

大月市は、資源の再利用とごみ問題に関心のある外国の青年達15名が、大月市を訪れ、牛乳パック再利用について、意見交換を行ったり、手すきはがき作りを体験したり、国際交流を行いました。

当時の西ドイツから参加した青年は、「牛乳パックが再利用できるとは思わなかった。広く活用できるのを見て素晴らしいと思った。」と感想を述べ、新聞のローカル版にも取り上げられました。

牛乳パックの手漉きはがき作りは、現在でも大変好評ですが、紙漉き体験は単なる趣味の推奨ではなく、行うにはきちんとした理由がありました。先述のように、牛乳パックを製紙メーカーへのルートに乗せるには、集めるまでに長期間かかりますが、一人一人の協力が不可欠なので、牛乳パックリサイクルに関心を持ってもらう手法として、「家庭でもできるリサイクル、紙漉き体験」を紹介していました。同年行われた「かいじ国体」の選手へのお土産に、牛乳パックによる手漉きはがき

昭和61年(1986年) 8月1日 金曜日

昭和61年(1986年) 10月2日 (木曜日)

日本製紙(株)日本テトラパック(株)紙パックリサイクル協業についての説明会を開きました

6月19日付けで、「飲料用紙容器リサイクルで日本製紙と日本テトラパックが協業」についてリリースされました。<https://www.nipponpapergroup.com/news/20240619.pdf>

未ざらし紙パック問題が各地に混乱をきたしている中で大手2社の協業発表は、今後の紙パックリサイクルシステムにどう影響するのか、全国パック連は速やかに関係団体、主要な紙パック受け入れメーカー、紙パックメーカーOB、乳業メーカーOB有志に意見を求めました。

◇パックマーク促進協総会（リリース2日前の6月17日開催）にて、出席された日本製紙（株）が協業について触れなかったことは理解するが、リリース後はできるだけ詳しい説明が欲しい。

◇冒頭、飲料用紙容器、以下「紙パック」のリサイクル率向上に向けた検討・取組について、幅広く協業することで合意しました。とあるが、容器包装リサイクル法上、飲料用紙容器、（紙パック）はアルミ付き紙パックを除外しているため、方向性②に示される項目は合意内容と齟齬が生じているのではないか。

◇方向性①のBKP（晒クラフトパルプ）100%を配合した原紙を継続して採用し、使用済み紙パックの高付加価値リサイクルを推進とあるが、方向性②の原紙以外の副構成物（樹脂、アルミ箔等）に関する産業用途でのリサイクルを推進、はアルミ付き紙パックを含んでおり、そうであれば現在のテトラパックが供給している未ざらし紙パックは協業違反にあたる容器となる、ただちに日本製紙より、未ざらしの利用中止を申し入れるべきではないか。

◇焼却時に発生するCO2はもともと木が大気中から吸収した炭素由来のため、大気中のCO2は増えないとみなすことができます。という文言は紙容器メーカーの言い分で、焼却自体なされるべきではないと考えます。

◇方向性①の日本が世界に誇れる分別回収システムを活用すべく→これまで市民が作り上げてきた日本の紙パックリサイクルスキームを「活用すべく」など大変遺憾です。

前回の王子製紙との件も同じですが、既存の回収ルートを大手メーカー同士の協業で利用するなど容認できません。協業でリサイクル率を求めるのであれば、新規開拓して新たなルートを模索するべきです。などの意見をいただき、取りまとめて日本製紙(株)紙パック営業本部に向けて意見の申し入れのメールを送るとともに、詳しく説明を伺いたい旨お伝えいたしました。

日本製紙(株)紙パック営業本部より対応していただけたとの回答がすぐであり、7月16日午後2時～ふじさんめっせにて、全国パック連とパックマーク促進協のアレンジということで説明会を開きました。

遠方の方のためにコアレックス信栄（株）のご厚意で、リモートでも参加できるハイブリットでの説明会を行うことができました。（会場への参加者8名、リモート参加者8名）

意見の中で、テトラパックのMIX回収の影響を被っている回収現場を担う団体の切実な訴えは日本製紙から見えたお二人以外の参加者にも響き、2社の机上で描いた構想図は説得力に欠いていると感じましたが、日本製紙が今回に限らず継続して協議していく姿勢を示されたことは評価したいと思います。



谷口台小学校にて出前授業を実施

相模原市立谷口台小学校の5年生の担任の先生からの依頼で、7月5日に出前授業を実施しました。コロナのパンデミックから4年ぶりとなる久々の出前授業でした。

5年生ではすでに牛乳パックを再利用した紙づくりに取り組んでいましたが、なかなかうまくできず、きちんとした作り方や牛乳パックのリサイクルについても学びたい、ということでした。

出前授業では牛乳パックのリサイクルの話や、マシンガンズによる啓発動画「牛乳パックリサイクルしないともったいない!」を見た後に、手漉きはがき作りに挑戦してもらいました。

自分たちが作っていた紙とは全然違う出来上がりに、子どもたちはびっくりしていたようです。



相模原市にてリサイクル講習会を実施

毎年恒例となっている相模原市での牛乳パックリサイクル講習会ですが、今回は橋本台リサイクルスクエアに場所を戻して、7月29日に実施しました。

プログラムも以前の通り手すきはがき作りと、ごみ収集車の乗車の2本立ての体験にしたためか12家族34名の参加を得ることができました。

コアレックス信栄(株)からも、再生製品を携えてお二人がお手伝いに来てくださいました。



持参した牛乳パックを回収ボックスに入れてもらうことも恒例となりました。



◎牛乳パックリサイクル・牛乳パック再利用マークについてのお問い合わせは
全国牛乳パックの再利用を考える連絡会 / 牛乳パック再利用マーク普及促進協議会
TEL.0554-22-3611 FAX.0554-56-9216 E-mail info@packren.org
ホームページ <http://www.packren.org> 〒401-0012 山梨県大月市御太刀 1-2-10